

あを 6

2017



神様の
落胆みた
志力バ

穂典



あそ

六 月



おぼろ

東京

佐藤 喜孝

るるるんのあとれんと昏ひひな
綿棒の一方のこる菜種梅雨
木星の座に移りたる春の月
点滴の空になる間に鳥は花
病院は大きなおぼろ夜はなほ

雑詠

山梨

井上 石動

透け見ゆる土手の夕暮れ木芽和
万房を鉢へ及ばせ藤の刻
瀬戸内や光る潮を夏燕
残したる伽羅のかをりや虎が雨
櫛形の山のあやめの濡れもして



埼玉

大日向幸江

上京中

カレンダーめくるや泳ぐ鯉幟
花曇山陰線で上京中
蛤のお吸物より鳴砂の
今帰る鳥取言葉囀れり
峠七つ越えて埼玉花嵐

千葉

黒澤 佳子

郁子

ガラス窓むべ数多なり傳句会
行き渡る風は隅田か花八分
千鳥ヶ淵歩道越え散る桜かな
回収船花びら掬ふ目黒川
水温む行き渡る風頬やさし

東京

七郎衛門吉保

五月

緑石の隙間のいのち草青む
見つめられ紅色の増す夕桜
全生園魂を呼ぶ八重桜
掃き集め小山なしたる紅椿
摩訶不思議教育勅語五月馬鹿

東京

篠田 純子

花マロニエ

春の雲ビルの動いてゐるやうな
葉桜に未だ蕾のありにけり
地下吹抜けの樹より地上へ花ふぶき
供養仏に女人一体花十葉
右麻痺の右手と繋ぐ花マロニエ



石川

定梶じよう

旁り

ひこばゆる盗伐されし此のくひぜ
夜桜をみてきて暗い仏壇屋
花の昼枝より垂るゝ縄を怖づ
抛りどころなく花ふゞきくゞりけり
欲の字の旁りがあくび春闌けて

埼玉

須賀 敏子

雑詠

単線や時に特急諸葛菜
鶯の鳴くや高麗川去り難し
花の冷えバブルを活きし叔父の近く
春休^{咲月さん}み終はり中学言少な
春キャベツつひ買つてしまふ料理本

埼玉

竹内 弘子

赤

かげろへるものに赤子の蒙古斑
赤貧を洗って乾して櫻見に
鰭立てて緋鯉のうかぶ霾ぐもり
末っ子の卒業赤飯よく噛んで
血のやうに流れて溜る櫻しべ

東京

田中 藤穂

春雷

恐龍の歩きぬし山桜満つ
春雷や北のミサイルには非ず
宙深く吸はるる落花モーツアルト
チューリップ馬の尻尾のゆらゆらと
事一つ終る寂寞夜の桜



三重

長崎 桂子

彼岸

お彼岸に畏まり聞く二日かな
低い椅子並ぶ感謝の彼岸寺
花を待ち早く出すやカルテット
養花天酒盛の老ゆるゆるり
晴天の足場軽やか花の雲

千葉

早崎 泰江

雑詠

気がつけば齢八十路に花辛夷
花吹雪おもはず眼鏡はずしたり
天地も老いもさくらふぶきの渦中なり
佗助やゆつくりのぼる磴の脇

東京

森 なほ子

咲き初めし

咲き初めし日も散りし日も花の雨
ビル風に混じり花びら朝の街
老桜や朽ちゆくものを朽ちさせよ
春の潮島に悲恋の言ひ伝へ
入り江の青沖のうす青花菜畑

東京

赤座 典子

カフェ傳

幼子のスマホを構ふ糸桜
春愁をそっと押しやる曲り角
健気なり胴吹き桜背伸びして
たんぽぽの絮捧げゆく二人組
青蔦の「傳」に育ちし十七年



埼玉

秋川 泉

今年の花

鉄平石ふみゆく句会むべの花
花曇亡き友しのぶ歩をゆるめ
いたはりつつ歩むふたりに花の雨
まどろみつつ乳与ふ猫春の昼
戦争の胸さわぎする花吹雪

東京

石森 理和

大阪

タコ焼を食べて春灯通天閣
大阪の大川春の陽光に
春の川観光船と渡し舟
競漕の練習始む桜の実
村中に蜜柑の花の香満ち
前号正誤降り出せり花はたたずむ三分咲き。



四月号作品より

森なほ子

冬雨に始まる一日旅と思ふ

佐藤 喜孝

冬の雨の朝は、誰しも憂鬱になりますが、作者は、その日を旅の一日と思うことにしました。人生が長い旅路なら、どんな日も旅の一日です。雨の日、雪の日、春の日も旅の途中の一日・・・深いです。

秩父山ムツばあさんの花の春

秋川 泉

秩父のムツばあさん。作者にとつてどんなかたなのでしょうか？ムツばあさんという親しげな呼び方は、昔からの古い知り合いとか仕えてくれた人とか。身内の方ではなさそうです。作者が子供のころからの親しい懐かしい存在かもしれせん。今は老いて故郷に暮らしておられます。厳しい秩父の冬も終わり、花の大好きなムツばあさんにうれしい春です。

と、つい想像をたくましくしてしまう私でした。架空の人物ではないことを祈ります。

おさげ髪目指すことある大試験

石森 理和

目的もなく漠然と、とりあえず入っておこうという子も多い入学試験。この少女は何を目指しているのでしょうか？おさげ髪という一語に、しっかりと生真面目な少女がみえてきます。きっと合格するでしょう。

不覚にもバレンタインに顔緩む

七郎衛門吉保

普段は硬骨漢をもって任ずる作者。バレンタインデーなんぞ、と公言していたのに、なんと可愛いお孫さんから、すっかり顔面筋が締まりをなくしてしまった七郎衛門吉保さんでした。このお名前

とバレンタインデーの違和感が抜群！

インシュリン腹に二単位花菜飯

篠田純子

腹に二単位と、大胆に詠まれ、インパクトがあります。注射か点滴か、花菜飯という季語で、取りあえず重篤な状態ではなさそうとわかります。ホッと
して、糖尿病なのに花菜飯か、奥さんは目の前でお
いしそうに一人で食べたのか、隠れてこっそりかと
余計な想像をしてしまいました。

湯上りの踵クリーム春浅し

須賀 敏子

冬うち使った踵クリーム、春めいてきて残り少なくなりました。でもまだまだ終わらない湯上りのク
リーム塗りです。春深しのころまでは油断できませ
ん。それでも長かった冬が終わり、これからの春
を実感している作者です。生活感の溢れる句です。

梅一輪心華やぐ一日なり

長崎 桂子

待ちわびた梅が今日一輪だけ咲いているのを見つ
けました。まだまだ寒い日が続くけれど、春の訪れ
をひそかに教えてくれたのです。うれしくなって、
その一日を浮き浮きした気分で過ごされた作者で
す。

野遊びや初めての靴すぐに脱げ

赤座 典子

かわいいですね！お孫さんでしょうか？人生初め
ての小さな靴、ちよつと大きすぎたのか、歩いてる
うちにいつの間にか脱げています。そんなことはお
構いなしにどんだん裸足で歩いて行つてしまいま
す。その靴を拾っては追いかけて、せつせと履かせて
あげるおばあちゃん姿が目に見えるようです。

あをキーワード俳句辞典（とつーとて）

とて

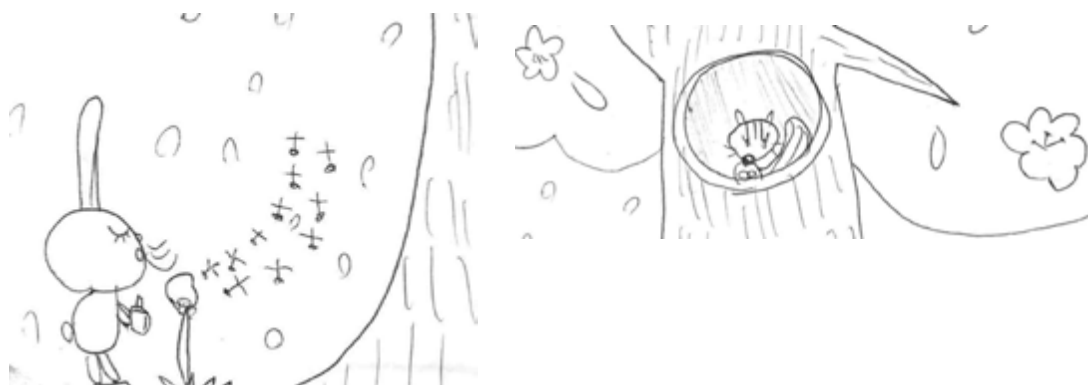
年酒とて「どんべり」といふ濁酒	赤座 典子
きさらぎや何時もいつとて富士は富士	須賀 敏子
蕾とて花の散るとて集ひけり	東 亜 未
句会とてどこか華やぐ春障子	田中 藤穂
幕の間を立つとて置きし秋扇	木村茂登子
薩摩御子女とてなみなみと年の酒	齊藤 裕子
名にし負はば桜山とて登りゆく	鎌倉喜久恵
さらばとて老鶯のケキヨ国訛	堀内 一郎
無花果は日に焼けたとて果てにけり	長崎 桂子
句はなべて迷ひごととて初時雨	堀内 一郎
鴉とてせはしなく飛び年の暮	早崎 泰江
永らへて誰に見しよとて寒の紅	篠田 純子
夏椿息ふるゝとてちりにける	佐藤 喜孝
赤富士を見よとて叩き起こさるる	田中 藤穂
無月とてワインで団子つまみをり	赤座 典子
吊橋のつなぐものとて蟬の山	佐藤 喜孝
癌だとして生きるは楽し曼珠沙華	齊藤 裕子
とても	
鴨鍋や敵は七人ありとても	八田 木枯
土手	

水上バス両の土手より落花飛花	篠田 純子
すつぽりとさくらもみぢの土手を行く	石森 理和
安房の土手豆の花咲く磯日和	関口 ゆき
土手の人にわかに溢れ桜咲く	渡邊 友七
初つばめ土手の長きをたのしめり	早崎 泰江
土手の草みごとに刈られ秋の風	早崎 泰江
渡り鳥仰ぎ見たしと通ふ土手	早崎 泰江
土手を背に田んぼを前の日向ぼこ	鈴木多枝子
いぬふぐり土手に光を集めけり	芝宮須磨子
ポンプ小屋土手の土筆の囲繞せり	定梶じよう
同窓の真砂女もあたり花の土手	芝宮須磨子
草の餅爪に吉原土手の土	佐藤 恭子
鴨川の土手をあちやこちや秋暑し	篠田 純子
秋出水土手の草花蓬けたり	長崎 桂子
初日の出土手ゆく我の長き影	山莊 慶子
土手霞み終の住処となりけり	竹内 弘子
兄と行く昔語りの春の土手	齊藤 裕子
タンポポの冠毛群れて土手光り	芝宮須磨子
川土手の青きに交じる草紅葉	山莊 慶子
土手蔽ふ小笹の間に春の雪	石森 理和
5クルル終へ土手を歩けばつくしんぼ	齊藤 裕子
草萌えて川岸の土手光り出す	齊藤 裕子

落蟬に動かぬものと動くもの	佐藤喜孝
菜種時雨食前食後飲み葉	石森和子
春の鹿に見つめられては動かれず	井上石動
山水をパイプで引いて芹豊か	大日向幸江
春の風地下階段を蹤いて来る	黒澤佳子
ガスコンロ新しくして桜鯛	七郎衛門吉保
ほほほおーんと梅を見上ぐる笠智衆	篠田純子
雪吊のすつくすつくといいい天気	定梶じょう



落味噌や少し迷ひし山の径	須賀敏子
春なれや半透明の潮汁	竹内弘子
春雲仏像展にゆくつもり	田中藤穂
日の色に明けて草木のうららし	長崎桂子
遊船のうねりよせくる桜かな	森なほ子
投葉の一種減りけり桜二分	赤座典子
落の臺幼子の手に香があふれ	秋川 泉



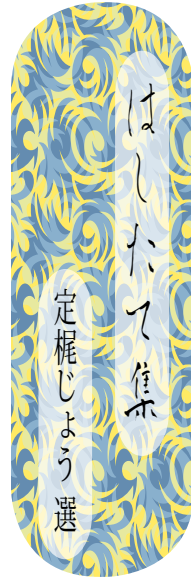
比来披見

ホトトギス 五月号	稲畑 汀子
木星も火星も見えて夏めく夜 一笛に祭の町となりゆけり 沖 五月号	稲畑 廣太郎
探梅の心覚えの土橋かな 雨月 五月号	能村 研三
桜の蕾つんと薄紅色兆す 槐 五月号	大橋 暁
よき種に古里のよき土と水 馬酔木 五月号	高橋 将夫
白梅の白の眩しき雪解風 風土 五月号	徳田千鶴子
実朝の濤に擲つ落椿 京鹿子 五月号	南 うみを
堂おぼろ揣摩憶測の水面下 六花 五月号	鈴鹿 呂仁
帯締の少し斜めや花衣 万象 五月号	山田 六甲
二ん月のお天気つづき寝たつきり 露のたうふんはりとある紙袋 春燈 五月号	大坪 景章 内海 良太
春塵をともし手に受け六地藏 鳴 五月号	安立 公彦
人待たず臘梅に顔うづめあて	高橋 道子



喜孝抄

末黒野 五月号	小川 玉泉
清滝の早瀬や潜く河鳥 触れ合へる一枝もあらず梅真白 やぶれ傘 95号	松本 三千夫
坂道をからすおりゆく春隣大崎紀夫 雲の峰 五月号	朝妻 力
星隴寝付けぬ鳥が声こぼす 萱 五月号	木村 嘉男 亀田虎童子
炉噺の焼けて匂ふ凍み豆腐 荷くづれのごとき日のあり春の家 ゆく春や軍歌の中の短音階 霽 五月号	小島 良子
方丈もこもれば皆春灯 塵芥に載る古時計春埃 こだま 四月号	松林 尚志 藤田 宏
花やかに告げる別れや花筏 蜷の道	松林 尚志 高橋 将夫
竜宮も月の都も古りにけり 故障したやうにきちきちばつた飛ぶ マドンナは今もマドンナ敬老日 水音は流れ去らずや秋の川 吐息では紙風船のふくらまず	



さて、最後の「はしたて集」、始めたいと思います。

須賀敏子

遅桜老人ホームの垣長し
彼方より八重の花屑流れ着く
御衣黄の咲くを確かめ回り道
御点前の稽古の終はる花曇
囁けば堅香子の花領けり

遅桜老人ホームの垣長し

中七、「老人ホームの」。あっても邪魔にはならぬようですが、やっぱりない方がすっきり、且つ中七で軽い休

止が入ります。「遅桜老人ホーム垣長し」。

彼方より八重の花屑流れ着く

「八重桜の花屑」、それを「八重の花屑」とした。よく分るとともに違和感も残ります。「八重桜花屑流れ着きにけり」。

御衣黄の咲くを確かめ回り道

「御衣黄」、「ぎよいこう」と読むはず。実物は見たことありませんが、友人の光画で見たことが。形は桜ですが色は、一すじか二すじだったかのピンクが走る以外は緑色。変った桜でした。「御衣黄の花確かめる回り道」。

囁けば堅香子の花領けり

このままで随分面白いのですが、作者を消してしまつて、「堅香子の花囁けり領けり」。囁くのも、領くのも、花にしてしまう方が面白い。

秋川 泉

水辺からどこまで続く蝌蚪の紐
ぎしぎしや歩むそばからぎしぎしと

吊橋の前も後ろも山笑ふ
さくら草植ゑる手伝ひ茶によばれ
花吹雪輪島の地にも散りしくか

水辺からどこまで続く蛸蚪の紐

「水辺から…続く」が句を平凡にしています。「どこまでも続ける蛸蚪の紐なりけり」。蛸々続く卵。

ぎしぎしや歩むそばからぎしぎしと

「ぎしぎし」は茎同士をこすりあわせない限り音がしないわけですから「歩むそばから」の措辞が非現実的に過ぎる。「ぎしぎしや歩めば音のするやうな」。

吊橋の前も後ろも山笑ふ

いい処を詠んで。でも「前も後ろも」に成語の匂いがします。「吊橋の先も後ろも山笑ふ」。何だ同じじゃないか、という勿れ。

さくら草植ゑる手伝ひ茶によばれ

意地悪く損れば茶によばれたのは植ゑる前か後か。日本

語の曖昧な処で、泉さんの責任ではありません。「さくら草手伝うて植ゑ茶によばる」。

花吹雪輪島の地にも散りしくか

おハガキの中で泉さん「まちがえ」か「まちがい」か、と仰有つていらつしやいます。結論をいえどちらも言い得ます。基本的には「まちがえる」が古くからの言い方で、「まちがう」は近年、ということらしい。違和感がなければどちらを遣つても宜しい、ということだと思っています。

長崎桂子

幾何学の模様の如し苗木市
風光る視野の限りの耕土かな
此処も又暗渠となりし鼓草
お神楽に村人総出の花祭
桜まじ提灯は揺れ人は去る

幾何学の模様の如し苗木市

面白い。柵の並びようを幾何学のようにだ、と。

此処も又暗渠となりし鼓草

他にもいっぱい暗渠化されて、ここもまた、ということでしょうか。余り意味がありません。たんぽぽの傍らのそれだけ詠めばいいのです。「鼓草此処ら暗渠となりしなり」。

お神楽に村人総出の花祭

この花祭は湯立神事の神楽のことか、あるいは淮仏会でしょうか。いずれにしても今は句の型だけみることにして、「村人総出の」の「の」が不必要と思います。語序もやや換えて「村人が総出の神楽花祭」。

桜まじ提灯は揺れ人は去る

「提灯は」「人は」の並立がやや煩雑。「桜まじ提灯揺れて人は去る」。

大日向幸江

ピンピンと針魚集まる朝の湾
帰り行く埼玉の地の陽炎える
蛤や耳の型ちの勾玉に

青天や凍土の中より恐竜

ピンピンと針魚集まる朝の湾

さよりは群集性がありますので、静かな湾内では本当にピンピンとよく跳ねます。なにしろ飛魚の仲間ですから。でも句の中で「ピンピン」の措辞は如何なものかと思う。少し過剰に、「澎湃と針魚集まり朝の湾」。

帰り行く埼玉の地の陽炎える

陽炎えるのは、帰りつく地、でなければ面白くない。それを強調して、「帰りつくや埼玉の地の陽炎える」。

蛤や耳の型ちの勾玉に

蛤は勾玉の耳のかたちのように見えますよ、ということでしょうか。面白いのですが「勾玉に」とした為にやや意味が不明になった。「勾玉は耳の型ちの焼蛤」。「焼き蛤」にしてみました。

青天や凍土の中より恐竜

「青天」が実に生きてます。中七以下の破調も効果的。

面白い。

赤座典子

堅香子の六万騎山覆ひたる
花は天人は地を埋む上野かな
子等の声吸込む大樹花の昼
遅桜筋ある爪北薄き紅
藤棚の下砂場の小半時

堅香子の六万騎山覆ひたる

六万騎山は片栗の群生で有名。片栗大好き人間の私にとって一度は行ってみたい処。私個人の好みでは「六万騎山を堅香子覆ひたる」。

花は天人は地を埋む上野かな

現代俳句風にするなら「花は天人は地を埋め。上野かな」。昔はこんな詠みかたをすると、ベテランの方からフンと鼻で笑われた。

子等の声吸込む大樹花の昼

「吸込む」、は表現過剰ではないでしょうか。「子等の声大樹に吸はれ花の昼」。

藤棚の下砂場の小半時

だからどうなった、と言わなかった処に余韻、余情。佳句。幼子も。

田中藤穂

蛙鳴く手より滑りし醤油壺
伝句会今日でをはりの花の雨
どさと置く土産の袋春キャベツ

蛙鳴く手より滑りし醤油壺

上五、「初蛙」と措くほうが中七以下に響く、と思うのですが。勿論「蛙鳴く」が不可というわけではない。

伝句会今日でをはりの花の雨

「花の雨」。上手に坐ってます。「創刊以来」と喜孝さんのあとがきにあります。ご苦労さまでした。

どさと置く土産の袋春キャベツ

典子さんの句の「人は地を埋め」としたのと同様、「どさと置き」と措くことで上五に軽い休止が生れます。

手を上げて別れさらりと春の駅

「さらりと」は副詞ですが、その中でも、さらさらとうろろろ、等の状態を表す副詞やゴツゴン、ガンガン等の語彙は詩歌では嫌われます。「さらりと」も状態の副詞なのです。思うに、「さらさらと」「さらりと」の「と」にその責めがあるのかもしれない。「手を上げて別れをさらり春の駅」。でも私ならことばを換えて「手を上げて然あらぬ別れ春の駅」としたいと思う。

ラジオ早や新茶話題に歯を磨く

中七末を「新茶話題に」としたために「歯を磨く」の措辞が浮き上がった。「歯磨きや新茶話題の朝のラジオ」。

七郎衛門吉保

残り雪畑に点画のクレーター
花冷えを少し緩める茶菓二つ

パッチンと叩き香を増し木の芽和
平手もて叩けば香る芽山椒
遠い富士うすむらさきや朧影

残り雪畑に点画のクレーター

見立て、見做しは江戸俳諧では可であり、芭蕉がそれを否とした。そして子規が、月並俳句として全否定して現代に至っているわけですが、吉保さんの句は「点画」も「クレーター」も「見立て」に当たります。一つならず二つ。「クレーター」かも知れぬ畑のはだれかな」。

花冷えを少し緩める茶菓二つ

以前にも述べたことあったと思いますが、坐五に据えた詞は重くなります。「茶菓二つ」に意味があるのかもしれないが読み手には分らない。上五にもつてくれれば未だしも。「茶菓二つ花冷え少し緩めけり」。

パッチンと叩き香を増し木の芽和

木の芽和えは、播鉢で山椒の芽をすって作る。ですから手のひらで葉を叩いてつかうことはしないと思うので

朴魯植俳句集 5 高島茂書写

すが、今はそれを置いて「パッチン」の語のこと。藤穂さん句でもとりあげましたが、副詞の中でも擬音・擬態語は上手に遣わないと、回りの語彙から浮き上がってしまふ。吉保さん句の「パッチンと」も浮き上がっています。坐っていないと思う。

遠い富士うすむらさきや臙影

佳句。遠い富嶽がおぼろでありながらくつきり見えるのです。それがうすむらさき。

メーデーを詠む人の減り赤い旗

「詠む人の減り。」が面白くないのです。「メーデーを詠む人ありや赤い旗」。

佐藤喜孝

日本中サクラが咲いてゐるといふ
ぎつしりと手をつなぎぬる寒の星

日本中サクラが咲いてゐるといふ

「咲いてゐるといふ」。今年のサクラは喜孝さんにとり

他人ごとだったので。

ぎつしりと手をつなぎぬる寒の星

「手をつなぐ」の形容に「ぎつしりと」を描く。喜孝さんはやっぱり、一つ外れたところで言葉遣う。真似したいが、真似しないほうが宜しいとも思う。特徴特色は作者だけのものなのです。

そして此の投句用紙の余白に

5/2 未明 恭子向うに行つてしまいました。
御交誼ありがとうございます。

とありました。ただただなさけなく。偏に冥福をお祈りします。

恭子さん

春星の出揃ふを待つ刻一刻

じょう



芝焼くや火頭守りて墓どろろ
彩門や壁火明りの一とくさり
諸君や山火明りに見え直り
歩む踏や家の古火見えとあり
聲む手に木吐く傘や春の雪
春山や頂上殊に岩はかり
春水やなべて甘く石滑ら
暖かや岩の裂目の穂長草

色に出て松の中なる木の芽な
美しき血のしみ出し種痘哉
春暖の大路に下りしかるが
櫻狩「対」むらに踊りつれ
深々と春眠にある夫人かな
石人に物預けして種を蒔く
春惜もて窓臺の欄干かな
室内や次の牡丹に灯をかし

下したる幟の温み疊みけり
花桐や地埃あがて通る雨
龍下りる穂麦の中の巖かな
花苔や永えの埃の彩武人
田植網聲かけ合うて張り定し
温室に吊りて低さや色蚊帳
南風や裳あふらしてせそぞろ
簾椅子や見てゐる程に太る雨

泊りがけや瓜買ひに幸し金玉峯
大藪の中の小村や蟬時雨
睡蓮や水映え揺らぐ舟障子
夕や剪るや含みし雨を振落し
でむしや月船帝廟の書庫かな
舊盆の相撲あるてふ銅鑼かな
埒もなや色よくあがる晝光火
猫捨てし幼な思出花野かな

毎月定額1000円
定価1000円（税別）

月刊

俳句界

2017年7月号

加藤楸邨

○ゆかりの地・丸根仏へ
○巻頭100句 ○巻頭年歌
○巻頭 中絶集行
○巻頭 山脈の俳人達

伊藤教子

○巻頭 伊藤教子
○巻頭 伊藤教子
○巻頭 伊藤教子
○巻頭 伊藤教子

角川晋樹

○巻頭 角川晋樹
○巻頭 角川晋樹
○巻頭 角川晋樹
○巻頭 角川晋樹

古田紀一

○巻頭 古田紀一
○巻頭 古田紀一
○巻頭 古田紀一
○巻頭 古田紀一

佐藤喜孝

○巻頭 佐藤喜孝
○巻頭 佐藤喜孝
○巻頭 佐藤喜孝
○巻頭 佐藤喜孝

石松

○巻頭 石松
○巻頭 石松
○巻頭 石松
○巻頭 石松

株式会社文学の森

TEL 03-6262-9196 URL http://www.jungku.com

二〇一七年六月号

発行日 六月十二日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト カット／松村美智子・ティリ エイマ

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替 00130655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。

あとかき

今号は一段陶酔ページになりました。ご寛恕を。次号より通常に復する予定です。よろしく。

ご芳志多謝

中川 節志 様

（喜孝）